

編集後記

* 1984年度の創刊時に編集業務を全般的に担当され、本会出版活動のルールを敷いてくださった今坂編集幹事へ深謝し、4月より編集業務を引き継ぐ。

* 編集業務と経理事務の簡素化と能率化を図るために、会報と会誌を合冊し、FIA研究会会誌; Journal of Flow Injection Analysis, Vol. 2, No. 1として本号を編集。旧会報と会誌の編集項目をすべて継承。表紙デザイン(いずれも九大理、佐藤美樹子嬢)の二者択一をまかされて、石橋世話人代表は苦悩されたが、結局会誌の表紙デザインを継承。

* 原稿依頼から製本までを約2ヶ月の短期突貫工事ですすめたので(第3回FIA講演会に間に合わせるために)、執筆者各位および広告掲載各社に大変ご迷惑をかけました。心からお詫び申し上げます。会員各氏の住所氏名を再確認して名簿を掲載しました(今任稔彦氏担当)。誤植等についてお気付の点を事務局へお知らせください。

* 編集業務の能率化と誤植(校正時)の危険性を避けるために、著者がタイプまたはワープロで作成された原稿(A4サイズ)をそのままオフセット印刷(B5へ縮小)。大部分の執筆者は”執筆依頼を受けてからパソコンを購入、猛練習した”と書き添えておられる。それぞれの原稿は個性的であり、なれない手付きでワープロのキーをたたいておられる大先生のお姿が推察できるが、多大の出費とご苦勞に対して心が痛む。痛みわけのつもりで、パソコンで初めて本稿を作成してみた。一枚につき2時間。パソコンの習得能力は若者の30%(40代)、15%(50代)へ低下するという説があるが、なるほど実感、それでもパソコン恐怖症から脱出できた爽快感あり。

* FIAを始めようとする人にも同様な心理的障壁がともなうようである。本を読んだり、講演を聴いただけでは、やる気は高まるが障壁はとれない。実演中の研究室へ一日入門し、サンプルを注入してみるのが早道である。パチンコのようにインプットとアウトプットの連動感が味わえるゲームであり、また林立するFIAシグナルは見た目にも美しい。老若をとわず一日にして障壁がとれ、魅惑されてしまうようである。心臓(ポンプ)、血管(チューブ)、脳(センサー)からなる人体模倣の構成であるから、脈動、閉塞、ヒステリー的応答などのトラブルもあらわれる。血管へ注射(サンプルインジェクター)するのが主な作業である。会議の合間に居室でも楽しめる頭の体操であり、趣味と実益をかねた大人のゲームと言えよう。

* RuzickaとHansenがFIAという技法を学術誌(Anal. Chim. Acta, 1975)に発表してから満10年を迎えるが、その普及速度はさまざま

じい。疫病が流行するモードと類似するところがあるらしい; Fresenius Z. Anal. Chem., 319, 74 (1984)。

* 論文数は1000編以上に達していると推定される。ブラジルの大地でFIAは重宝がられているが、中国でも威力を発揮しつつある。スペインの研究グループの最近の活躍は特に目立つ。各方面で実用性の高いゲームであると認知されたのは同慶。

* 酵素関係の論文が増加しつつある。原子吸光や原子発光を利用したFIAの増加率も目立つ。FIAによる同時定量の問題への関心が高まり、試薬の選択性、マルチ波長検出器、複数の検出器の組合せ、速度論的因子の加味など条件設定は多彩。

* 濃縮や妨害除去を目的としてカラムをつけた例も増えてきた。LCかFIAかと分類に悩む場合もある。疑がわしきは仲間に入れよ と言う主義でFIA Bibliography に収録した。FIA とLC の互換性を配慮したシステム設計がますます増加する傾向がある。

* 溶媒抽出への関心も非常に高いが難問の多い分野である。短期的な再現性はよいが、ある時突然乱調になることがあり、信頼性が乏しい。講習会で実演するときには細心の注意がいる。相分離装置に抜本的な発想の転換が必要か？

* ”バッチ法で可能なことはすべてFIAで可能である”と豪語したら、”バッチ法では不可能だが、FIAで可能なものは？”と反問された。自動化と迅速化に加えて、”可能化”に関するFIAの機能的特異性も問われる世代に移りつつある。

* 広告欄に見られるように、FIA装置、その周辺機器や試薬の開発が活発化してきた。上記の諸問題だけでなく、規格や用語の検討、産学共同の開発研究の可能性等についても、時間をかけた討論の場がほしい との声が強い。

* FIAに関する日本の研究活動は世界的に高く評価されている。次回の国際シンポジウム(今回の Flow Analysis III は英国、お知らせ欄参照)はアメリカが有力候補であるが、日本で開催してはどうか？との海外からの打診もある。将来の受入れ態勢についてご検討いただきたい。

* 本研究会の英文名称と本誌の略記法(英文)についての問い合わせが多いが、まだ決まっていない。事務局案としては、研究会名称として The Japanese Association for Flow Injection Analysis, 略記法として J. FIA を考えています。

* 本誌は内容も体裁も編集方針は流動的です。しばらくは各著者の多彩で個性的なワープロ原稿をお届けしながら、会員各位のご意見を拝聴し、編集方針を決めたいとおもいます。ご意見をお寄せください。(与座 範政)